

酪農育英会だより

2012年12月1日発行 2012年版 財団法人酪農育英会刊 ●題字／原田 勇

酪農学園創立80周年を前にして

財団法人酪農育英会理事長 原田 勇



酪農育英会だよりの2012年号をお送りすることを皆さんと共に喜びたいと思います。

本育英会の目的は「有為な農村青年にして、経済的理由により、勉学の機会に恵まれない人々に対して、出来る限りその機会を与えたい」という設立者の願いによって50余年前に設立されたものであります。

その後、多くの賛同者の精神的現実的な支援によって本会の事業が継続され、しかも1990年代には、時代の変化と状況に合わせ、佐藤貢2代理事長、黒澤力太郎常務理事と共に、この目的をアジア諸国の農村青年にまで拡大して趣意書を作成し、志ある方々のご支援を頂いてきたのであります。(本誌2010年号5頁)

本財団の原点を思うとき、時あたかも酪農学園は創立80周年を迎えようとしています。酪農学園が多くの酪農民団体(酪連・雪印関係諸団体、北連など)はもとより、理解ある団体や個人の絶大なご支援により設立され、その支援が今日も継続されていることを思うと、来る酪農学園の80周年記念事業の一貫として、その本来の酪農義塾、機農学校(同高校)、短大、さらには現在のとわの森三愛高校、大学、大学院についての積極的支援が今後も引き続き行われるべきではないかと切に念願するものであります。

私個人としましても、興農義塾機農学校、さらに機農高校に編入しての基礎学習と、その後の多面的な支援がなければ、とても現在のようなHigh speedの時代に、しかも高質の多様な変化に対応して、学園長として、また本会の理事長などの重責を果たすことは不可能であったと振り返り、しかも創立者黒澤西蔵や学園関係者の指導によらなければ、その役割の一部すら勤めあげることができなかつたと思っています。

今や北海道の多面にわたる農業問題、日本やアジア地域の諸課題は一北海道やアジア一国では解決できるものではありません。アムール州のロシア極東農学大生が2度にもわたって酪農大に送り込まれ、アジアのknow-how(日本のやり方)を学んで、ロシアの開発発展に結び付けたいという想いが、よく理解できるような気がします。

私はこのような学園大学のショート研修ツアー(10~30名位、1~3週間)の参加者に、国際交流課を通じ「酪農学園の歴史と使命」について語る機会を得ました。幸い学園スタッフには英語、ロシア語、モンゴル語など語学に堪能な人たちがいますし、また、JICAなどのわが国の経済力も引き出して活用できるスタッフも増加してきていますので、このような事業は必ず成功すると思うのです。これは短大・大学初期の三愛塾の今日版であり、日本農村からアジア圏への啓蒙活動ではないかと、常々考えているところです。さらには戦後、川村秀雄高校長がいち早く立ち上げた酪農学校(通信教育)、その後の短大2コースの今日版であり、現在、とわの森三愛高校で成果をあげつつある通信教育にもつらなるものと思います。

本年度をもって60周年の歴史を刻んだ酪農短大が閉校することになりましたが、アメリカWisconsin大のショートコースは今も続いて、世界から多くの農村実習学徒や農村に働く若人にその勉学のチャンスを与えています。

今こそ、日本やアジア諸国の農業にかかわる人々に、酪農学園の基本的理念である三愛精神、聖書やイエスの思想が何であり、また最新の農食環境(獣医を含む)の技術が如何なるものであるかをいち早く伝える責任があると思うのです。

混迷する世界のために、勇気を持って立ち向かって行く自信と希望をもった人間を提供する責任が我々にはあるのではないかと思う次第です。

受けた恵みへの感謝を心に

とわの森三愛高等学校長 榮 忍



酪農育英会の尊いお働きに、感謝と敬意を表します。

「公立高等学校の授業料無償化」は、私立高校には衝撃でした。北海道では高校進学選択が公立指向であることを考えると、「授業料負担がなくなる」という文言の持つ力の影響を無視できないからです。私学には就学支援金として、公立高校の授業料分が支給されることにはなりました。さらに家計の状況により、5割増、10割増の支援金加算システムもあります。しかし、公立高校ならば無条件に無償ですが、支援金には3年間の在籍期間枠が付いて回ります。手続きも、学校事務に大きな負担となっています。

私立高校は、経済に振り回されてしまうものといえる面は確かにあります。

しかし、教育においては、安易な安売りをすべきではないと考えますし、私学を選び、敢えて経済負担を引き受ける決断をされた受験生と保護者に対して、代価にふさわしい教育活動を整えなければならないと、常に考えています。

現代の高校生が、家計についてどれほど教えられているものかは調べておりませんが、親は、そのような負担を感じさせまいとしているものではないでしょうか。教育にお金がかかるのも現実です。家計事情によっては、奨学金は大きな助けになっているはずです。

今年度も酪農育英会によって、酪農後継者を中心に、月額1万円の給与奨学生17名（2011年度に東日本大震災被災による追加決定3名を含む）、2万円の貸与奨学生1名が、本校での学校生活を支えられています。学校としては、給与奨学生が、単に「得をした」で終わらず、将来誰かを支える働きに繋がるよう、そして、返還の義務を伴う貸与奨学生が、誇りを持って自らの学費負担の責任を果たせるよう、その心に働きかけることが大切です。

キリスト教の考え方からは、恵まれた者が、その恵みに感謝し、自発的に応答することが求められます。大きな成功を取めた人が、多額の寄附をすることだけでなく、「感謝する心」が、なすべき応答を整えるのです。神によって与えられた命と、神の導きによる人生における出会いが、生きる場を生み出していることに感謝し、一つ一つを恵みとして数える視点を伝えて行きたいものです。

公益法人の認定へ向けて

(財)酪農育英会常務理事 日下 雅順



◇10月に北海道総務部へ本審査の申請を行いました◇

酪農育英会の公益認定へ向けての取り組みにつきまして、2010（平成22）年発行の『酪農育英会だより』に記載しましたが、その後、公益認定へ向けて取り組みを進めてまいりました。現在までの進行状況につきまして報告させていただきます。申請は次の手順で行いました。

1. 認定後の、最初の理事（代表理事）・監事・評議員の選任について評議員選定委員会・理事会・評議員会を開き選任いたしました。
 - *評議員選定委員会：構成員（部外者2名、評議員1名、監事1名、事務局員1名）
 - *代表理事：原田 勇（現理事長）
 2. 現行酪農育英会寄附行為を認定後の酪農育英会定款へ変更するための手続きを進め、理事会・評議員会を開き決定いたしました。
 - *任期：理事2年、監事・評議員4年、
 3. 酪農育英会が現在行っております事業について公益目的事業として該当するか否か、北海道と協議を進め、設定いたしました。
 - *公益目的事業の定義
 - A：学術、技芸、慈善その他の公益に関する種類の事業であって
 - B：不特定多数の者の利益の増進に寄与するものをいう
 4. 認定後の新しい会計基準に合致させるため、設定した事業及び運営費などを収入・支出毎に振り分けを行い、組み換えました。
 - *財務に関する公益認定基準の一部
 - ①収支相償・公益目的事業について収入が費用を超えてはならない
 - ②公益目的事業費率・公益目的事業費が経常費用の50%以上でなければならない
- 以上のような手続きを踏み申請いたしました。審査が通り認定されましたら、2013（平成25）年4月1日に公益財団法人酪農育英会として移行スタートすることとなります。

☆ご寄付について

財団法人酪農学園後援会を通じ、「酪農育英会」にご寄付を頂いた場合は、税額控除制度の適用を受け、減税の対象となります。

真剣に求めなさい さらば与えられん (ルカ11章8～13節)

酪農学園大学1期、短期大学9期生 細田 治憲



私の人生9転10起。入退院や手術他、死線を越えるような経験を繰り返し、その度に生かされて今日があります。一面において傷だらけの戦士かもしれません。しかし、全日本ホルスタイン共進会で名誉賞や優等賞の栄に浴したり、各地の共進会で数多くの最高位賞を受賞したり、最優秀繁殖牧場に選ばれ感激の涙…その度に「酪農は一人ではできない。仲間同志の連繋と協調、即ち、仲間の為に汗を流すことのできる奉仕の精神がなければならない。その中であって、自分も切磋琢磨する」ということを実感するのです。

私は昭和33年、酪農学園短期大学に入学でき、幸いにも、(財)酪農育英会、第1回奨学生として、また、酪農学園大学創期生でもありますので、3～4年生の2年間、合わせて4年間奨学資金を貸付して頂きました。当時わが家は貧しかったのに大学に3人も進学しておりました。母と兄が経済的にどのようなやりくりをしたのか？振り返ってみると不思議でなりません。奨学資金の貸付がなければ進学は全く不可能なことであり、心から感謝致しました。私の酪農学園大学卒業を待って、兄は2年間酪農研修の為渡米したので牧場を守りました。兄が帰国した年、私も渡米、酪農研修に出かけたのですが、半年後、突然“あなたのお兄さんのお葬式が終わって…”という過去完了の事実を知らされ腰が抜けてしまって…以来45年。資金を借り、規模拡大を繰り返し、後を振りむくこともなく馬車馬の如く突進し歳月が過ぎました。その間(33年前)韓国の酪農家尹汝昌氏御夫婦との出会い。お互いに夜空を見ながら“北極星”を指差し“私の牧場の冠名は「NORTH-STAR」、韓国で北極星を見たら私の牧場と北海道の酪農仲間の事を思い出してほしい。”“韓国の酪農は黎明期なので、韓国酪農発展のため尽力してほしい。”と語り合い、強い握手を交わし別れて以来、韓国から研修生を受け入れたり、留学生のお世話をし、現在に至っています。

私のアジアに対する想い…それは、お世話になった酪農学園、アメリカ実習に際し、お世話になった方々、私の夢と希望と目標をサポートして頂いた多くの恩師、先輩、仲間、一緒に努力してくれた研修生の方々に対する感謝の気持の一端であります。

健康で生かされていることに感謝しながら、今日一日ベストを尽し努力する。人生はその連続だと思っています。(夕張郡由仁町 酪農家)

研究支援に感謝

酪農学研究科修士2年 ^ソ ^リ ^ガ 苏日嘎



皆様、こんにちは。

酪農学研究科修士2年のソリガと申します。

この度、酪農育英会奨学生にご採用頂き、誠にありがとうございます。私は2010年の10月酪農学園

大学・酪農学研究科に入学し、環境リモートセンシング研究室、星野先生のもとで、家畜行動解析により内モンゴルの草原退化に関する研究をしております。研究結果の一部を今月下旬にドイツ・ミュンヘンで行う国際学会IGARSSで発表する予定です。今の修論完成や学会発表準備で忙しい日々の中で、今回採用して頂いた奨学金によってアルバイトの回数を減らすことができ、学業により力を入れて、勉強に励める環境において頂けていることを大変有難く感じています。頂いた奨学金は学費の一部とドイツで行う学会の費用の一部として使わせて頂きます。

酪農育英会奨学生として、これからも、一生懸命勉強に励み、自分の研究に精一杯努力し、頑張っていきたいと思っております。

修士号を取得後、来年の4月から本研究室で引き続き博士課程への進学を目指して居りますので、今後も皆様のご支援のほどどうぞよろしくお願い致します。本当にありがとうございました。

^ソ ^リ ^ガ 苏日嘎さんは1983年に中国内蒙古に生まれ、北京郵電大学を卒業後、2010年10月酪農学園大学大学院に入学されました。母国語はモンゴル語ですが、日本語、英語、中国語を話し、優秀な学生であると、担当の星野先生からお聞きしています。

今年3月にはIEEEの国際会議に研究論文『Change detection method for pasture degradation using RGB color composite image of multitemporal Landsat TM-A case study of the Inner Mongolian settlement region』(ランドサットTM衛星のRGBカラー合成技術を用いた土地被覆変化の抽出方法に関する研究—内モンゴルの定住化した地区を対象に)が受理され、ドイツの国際学会でポスター発表を行うなど、国際的な評価を受け、今後の活躍が期待されております。

上の文章は、苏日嘎さんご本人が、本年度酪農育英会の奨学生に採用された際、7月10日の授与式に日本語で準備されたものです。(事務局)

原田学園長との出会いがもたらした人生

—今にして思う偉大なる創立者たち—

酪農学園野幌機農高等学校（15期）中林 正明



私は昭和32年4月、酪農学園野幌機農高等学校に入学しました。

日本初の学園紛争（同盟休校）終息直後であり、樋浦誠校長も短大学長兼務でスタートした時でした。

原田勇先生も短大と高校の先生を兼務されておりました。週の初めの全校朝礼では、樋浦先生の小さく優しい声がだんだんと鋭い口調にかわるのにそれ程時間はかかりませんでした。高校3年生の頃には樋浦先生の三愛塾に惹かれ、家庭の事情により短大進学ができなかったが、そのまま北海道各地で開催された三愛塾に常連として出席をしました。

高校時代の原田先生は「土と肥料」の授業より、先生個人の生き方、農業を行うハードな部分より経営者としての人間像的な思い入れの話の方が大変記憶に残っています。

私の人生に多くの影響をもたらした学生時代と三愛塾は、その後の生き方に陰に陽に支えになったことは言うまでもありません。

樋浦先生に接した方々は一度は耳にした言葉だと思いますが、「農民は豚だ」「人間は無知だ」「無知が故に怠惰な生活に陥る」等々。人としての謙虚さ、生きる上での指針となる強い信念、信仰がない者は「農」という天と地の摂理による環境では生きられない。こうした樋浦先生の話を理解しやすく具現化したのが原田先生だと思います。まず人の話を聞き、相手の

気持ちを考えながら少しずつ優しく修正してくれる人間味のある語りかけ、それでいながら次の時代を考えた問題の提起を忘れない人であります。

酪農学園は、農業の理論や技術の究明だけでなく、仕事の分野を越えて「人間はいかに生きるか」という、素朴でいて最も大切な問題を真正面から掘り下げる教育を、創設者黒澤西蔵先生から樋浦先生、そして次の先生方と脈々と受け継がれてきております。まさに「強大な家族」であり「誰もが帰れる心の家」であるかのように、その存在が特異な学園であると思えます。

一般もご多忙中の先生にお会いし、「いまや日本の酪農学園でなく、世界の酪農学園としてますますその存在が重要である」とのお話に共感しました。農場での実践と知識、それにふさわしい心の強さ、「神・人・土」の三愛精神を基に「健土・健民」はいまや世界にも通じると思えます。そうしてこの学園で学んだ卒業生の一握りでも「強靱な使命感」を抱き、地域社会の中で「次の世代のために何をせねば」との思いを持ち続けることが、やがて大きな社会の変革の発火点になると思えます。

酪農学園を目指して門を叩いた学生諸君を初め、何かのご縁で学園に繋がりのある方は、1日でも1時間でも多くの時間をさいて、このような先生のお話を聞く機会を自ら作るべきだと思います。

また、そのために費やした時間の価値の重要さがやがて自分自身

訃報 菊地正一様

酪農学園の常務理事、酪農学園後援会の常務理事などを歴任され、酪農育英会の理事として1972年6月21日～2009年6月29日迄の永きに亘り、温かいお力添えを頂きました菊地正一様が、去る9月5日、満99歳で天に召されました。最後まで学園を思い、学生生徒のことを思ってご尽力を頂きました。安らかにご永眠されますよう心よりお祈り申し上げます。

にとつての今後の使命感に変わることを知る時が必ず来ると確信しております。

私自身が40年近く農業経営から離れ企業運営の道に身を置きながら、先生と年に1回～2回お会いし、約1時間ほど言葉を交わす時間をもうけて頂いておりました。先生は現在の高度なビジネス社会とは無縁の方でありながら現実的な「売った」「買った」の世界より、その底辺にもっと大切な「人対人」「人と文化」、特に私の企業のように海外での輸出入を行っている場合は「文化対文化」等についてビジネスの根源である最も重要なコミュニケーションという「人間性」に関しての会話の中で、今でも大変役立つご指導を賜っております。

また、原田先生の言葉を通して学園の、70数年間の歴史を再現されるときに、その時代に見落としたことや見えなかったことが鮮明に、しかも今日でも適応できることが先生の言葉から幾度も教えられました。

酪農学園設立以来の波乱万丈ともいえる歴史の源流の証人としての原田先生の言葉は、決して過去の歴史の証人としてではなく、むしろ得難い歴史の当事者としての「明日への証人」であり、その言葉には聞く人に「使命感」を抱かせる貴重な存在であると思うのです。

「酪農育英会」事業の継承を

～最も必要なことは人づくり～

(財)酪農育英会理事 仙北 富志和

北海道酪農義塾から始まった本学園の教育理念として、経済的理由から「学びの門」を叩けない苦学青年を支援するということがある。黒澤西蔵自らの青年期の体験と、困窮する酪農民の組織化運動からの発意である。寮生の生活費や学費を一切徴収しないとするものだ。

ところが戦後、わが国の経済事情が根本的に激変したこともあって、この方針は断念せざるを得なくなった。だが西蔵の青年教育への熱い思いは止むことなく、むめ江夫人とともに私財を投げ打って、修学を助けるための育英事業を起こした。これが「酪農育英会」の緒である。

設立への思い

西蔵は育英会設立の思いを次ぎのように語っている。

「今日最も必要なのは一にも二にも人である。産業の興隆も、文化の発揚も国家社会の発展も結局人の問題であり、また、一身一家の盛衰興亡もこれすべて人によって決まるのである。人を育てる仕事ほど尊い仕事は他にないと思う。私が微力ではあるが教育に心血を注いでいるのはこのゆえであり、一人でもよい人を育てたいからである」

「酪農業の真の実践的指導者は意外に少ない。その理由は、農村には思想が堅実で身体も強健であり、しかも向学心に燃える青年は相当いるのであるが、農家の資力では高校以上の学校に入学し、勉学することはなかなか難しいのである。従ってあたら秀才が埋もれてしまうという、まことに残念なことが至るところに見られるのである。私はこの事実を

永い間見聞きしており、そこで微力ながら意を決して酪農育英会を設立し、貧困に悩む青少年に幾分なりとも力を貸して就学の機会が与えられるよう願った」

徳は孤ならず

西蔵は、足尾の鉍毒被害民救済のために闘う田中正造と行動を共にするが、学業をかなぐり捨てて権力に立ち向かう黒澤青年の将来を案じた正造は、復学を勧めた。正造は毎月10円（現在の6～8万円か）を送ることを約束したのだ。

「手を合わせて拝む思い」であった西蔵は、赤貧の正造が高額な学費を工面してくれたことを長く気に留めていた。時がはるかに過ぎた1961（昭和36）年になって、この学資金の出所を知るに至った。正造は栃木県の篤志家、^{たてぬまじうきち}蓼沼丈吉に「同人（西蔵）の精神は、正造の遠く及ばざる点多く、気力また及ばざる点多し。勉強また及ばざる点多く候、同人は第一正直にして一言発せば皆これを実行するの気性あり…」との書簡を送り、西蔵青年の学業支援を懇願していたのだ。

正造はこの資金を、直接西蔵に渡すことなく今村力三郎弁護士を介していた。自分は高齢であり「万が一のことがあっても西蔵青年が困ることのないように」との配慮からであったとされている。今村弁護士は、西蔵が投獄された際、無罪を勝ちとるために奔走して

くれた恩人である。「徳は孤ならず、必ず隣あり」、西蔵は多くの恩義に支えられて今日があることに改めて感謝し、育英事業の更なる充実を期した。

蓼沼丈吉翁

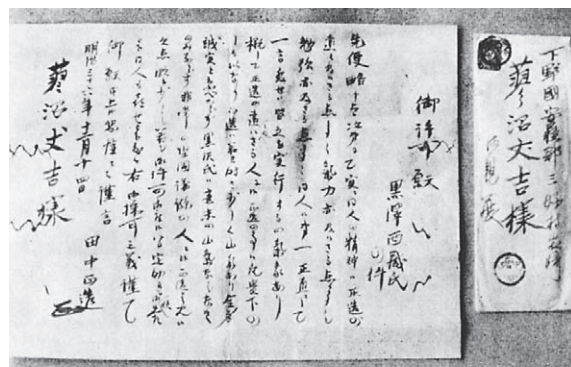
田中正造の懇請を受け入れて、西蔵青年に学費を援助した「酪農育英会の源々流」ともいえる蓼沼丈吉とは如何なる人物なのだろうか。丈吉翁は、正造が明治天皇への直訴のために辞任した後を受け継ぎ衆議院議員を務めている。1862（文久2）年、現在の栃木県佐野市に生まれた豪商の4代目である。地域の産業（織物）・金融（銀行）・運輸（鉄道）の振興のために多くの功績を残している。1911（明治44）年、「蓼沼慈善団」を設立し、大隈重信ら著名な篤志家の支援も得て育英事業を始めている。現在もなお「財団法人三好園」としてその意志が引き継がれ、地域の向学意欲の強い大学進学青年らを対象にした奨学資金の貸与事業を行っている。丈吉翁の「与えても求めない」、無償の精神は百年後の今日に生きていることになる。

酪農育英会創立の思いを次代に引き継ぐ責任を改めて意識したい。

我が成せし仕事の内で育英は

人に知られぬ偉業かと思ふ

（酪翁）



田中正造の蓼沼丈吉あて書簡
—御許可願 黒澤西蔵氏の件—（1903年）
（酪農学園史編纂資料から）

2011年度の事業報告及び2012年度の事業計画

2011年度事業報告

1 奨学金貸与事業：奨学生46名に対し、総額20,160,000円を貸与した。
*貸与月額（大学・短期大学：4万円、高等学校：2万円、大学院：5万円）

内訳	予算		決算		差異	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
大 学	40	18,560	39	18,160	1	400
大 学 院	3	1,800	2	800	1	1,000
高 等 学 校	9	2,160	5	1,200	4	960
計	52	22,520	46	20,160	6	2,360

2 奨学金給与事業：奨学生25名に対し、総額5,960,000円を給与した。
*給与月額（大学・短期大学：4万円、高等学校：1万円、大学院：5万円）

内訳	予算		決算		差異	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
私 費 大 学	3	1,440	2	800	1	640
留学生 大学院	4	2,400	5	3,000	△1	△600
邦 人 高等学校	15	1,800	18	2,160	△3	△360
邦人留学生 邦人留学	1	480	0	0	1	480
計	23	6,120	25	5,960	△2	160

・高等学校の採用18名の内3名は東日本大震災による特別枠

3 奨励金交付事業

(予算：団体1，個人1 交付総額600,000円)
(決算：団体1，個人1 交付総額600,000円)

- ・団体研究奨励金（1件 300,000円）
日本酪農青年研究連盟に対し、第63回日本酪農研究会における最優秀賞（黒澤賞）の副賞（酪農育英金）として交付した。
- ・個人研究奨励金（1名 300,000円）
酪農学園内の40歳未満の教職員1名に対し交付した。
獣医学群獣医学類 美名口 順 助教
(研究題目) 肝線維化における星細胞の役割

4 『酪農育英会だより』の発行

2011年12月1日付にて『酪農育英会だより』2011年版を発行し、学園役職員及び関連団体役員、奨学生などに配布した。

2012年度事業計画書

1 奨学金貸与事業：奨学生47名に対し、総額21,480,000円を貸与する。
*貸与月額（大学・短期大学：4万円、高等学校：2万円、大学院：5万円）

内訳	予算		予算(前年)		増減	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
大 学	41	19,320	40	18,560	1	760
大 学 院	2	1,200	3	1,800	△1	△600
高 等 学 校	4	960	9	2,160	△5	△1,200
計	47	21,480	52	22,520	△5	△1,040

2 奨学金給与事業：奨学生25名に対し、総額6,360,000円を給与する。
*給与月額（大学・短期大学：4万円、高等学校：1万円、大学院：5万円）

内訳	予算		予算(前年)		増減	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
私 費 大 学	3	1,440	3	1,440	0	0
留学生 大学院	4	2,400	4	2,400	0	0
邦 人 高等学校	17	2,040	15	1,800	2	240
邦人留学生 邦人留学	1	480	1	480	0	0
計	25	6,360	23	6,120	2	240

3 奨励金交付事業

(予算：団体1，個人1 交付総額600,000円)

- ・団体研究奨励金（1件 300,000円）
日本酪農青年研究連盟に対し、第64回日本酪農研究会における最優秀賞（黒澤賞）の副賞（酪農育英金）として交付する。
- ・個人研究奨励金（1名 300,000円）
酪農学園内の40歳未満の教職員1名に対し交付する。

4 『酪農育英会だより』の発行

『酪農育英会だより』2012年版を発行する。

5 その他

公益認定の申請を行う（申請中）。
10月9日北海道に対し電子申請を行った。

事務局から

今年は残暑の厳しい日が続いたかと思うと、足早に秋は過ぎ、あつという間に冬到来となりました。日々の気温の変化に、体調を崩された方も多いのではないかと思います。冬場の電力消費量も気になる今日この頃ですが、無理をしない節電で、明るく新年をお迎え下さい。

さて、育英事業の運営は、長期に及ぶ超々低金利時代で、相変わらず厳しい状況が続いており、学生生徒の皆さんに必ずしも十分な奨学事業を行えないことに憂慮しております。限られた予算の中で、また

酪農学園後援会を始め、篤志の方々の温かいご支援をいただきながら、できる限りの運営を進めて行きたいと願っております。
(奨学金返還中の皆様へ)

この度、奨学金の返還通知を同封いたしましたのでご確認下さい。奨学金の返還金は、在学生の奨学金として運用されますので、期日を守って返還を行って下さい。住所変更、ご事情により返還が困難の場合などは必ずご連絡をお願いします。

「ゆうちょ銀行」普通貯金口座からの自動振替のお申込みも、引き続き受け付けておりますので、ご希望

の方は事務局までお申し出下さい。(振込手数料は金額にかかわらず1回25円/毎月払いの場合年間300円となります。)

来年4月を目途に公益認定を受けるべく、準備を進めております。

育英事業の更なる充実のため、今後とも皆様のご協力を宜しくお願い致します。

酪農育英会だより
2012年12月1日発行 2012年版
財団法人酪農育英会
〒069-8501 江別市文京台緑町582
TEL 011-386-1211
E-mail: rg-ikuei@rakuno.ac.jp
印刷 北海道リハビリ